

FLORA KANAGAWA

Mar. 26. 2020 No.88

神奈川県植物誌調査会ニュース第 88 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@flora-kanagawa2.sakura.ne.jp



図1. ケナシヒメハギと混生する有毛のヒメハギの形態.

(左上). ケナシヒメハギの茎葉(三浦市三崎町城ヶ島 2017年4月).

(右上). ケナシヒメハギと混生する有毛の個体(三浦市三崎町城ヶ島 2017年4月).

(左下). 開花中のケナシヒメハギ(三浦市三崎町城ヶ島 2017年4月).

(右下). 冬季のケナシヒメハギ(三浦市初声町下宮田 2019年2月). すべて 鐵 慎太郎撮影.

ケナシヒメハギについて

(鐵 慎太郎)

はじめに

三浦半島の岩石海岸でのフロラ調査や植生調査の際、ヒメハギ *Polygala japonica* Houtt. の品種

であるケナシヒメハギ *f. nudicaulis* Konta の存在に気がついた。本品種は静岡県下田市の沿海地で採集された標本にもとづき記載され (Konta & Matsumoto, 2006), 海岸型の品種とされている (近田, 2007). 『神奈川県植物誌 2001』(神奈川県植

表1. ケナシヒメハギ *P. japonica* f. *nudicaulis*に相当する標本の一覧.

標本番号	採集場所	立地	採集年月日	備考
KPM-NA0035826	神奈川県真鶴町真鶴(真鶴岬)	海岸	1951年12月2日	
KPM-NA1003497	神奈川県横須賀市長井(長浜)	海岸	1987年4月12日	
KPM-NA1003504	神奈川県三浦市三崎町城ケ島	海岸	1987年5月4日	
KPM-NA0305856	神奈川県横須賀市長井	海岸	2016年4月14日	著者採集
KPM-NA0305852	神奈川県三浦市三崎町諸磯	海岸	2016年5月2日	著者採集
KPM-NA0305781	神奈川県三浦市三崎町城ケ島	海岸	2017年4月22日	著者採集
KPM-NA0305765	神奈川県三浦市三崎町諸磯	海岸	2017年10月9日	著者採集
KPM-NA0305812	神奈川県三浦市初声町下宮田	海岸	2018年4月30日	著者採集
KPM-NA0305801	静岡県加茂郡南伊豆町小浦	海岸	2018年11月5日	著者採集
KPM-NA1003546	神奈川県横浜市中区中里	内陸	1984年5月5日	
KPM-NA0167632	神奈川県大井町柳	内陸	2013年4月15日	

物誌調査会, 2001) や『神奈川県植物誌 2018』(神奈川県植物誌調査会, 2018) を含む多くの書籍や論文, YList には非掲載の分類群であるため, 知名度は低いと思われる. 筆者は三浦半島を始めとする各地の海岸で現地観察を行うとともに, 生命の星・地球博物館で標本調査を行い, ケナシヒメハギの分布状況を確認したので, 本稿で紹介する. ケナシヒメハギを含むヒメハギの品種が注目されるきっかけになれば幸いである.

ケナシヒメハギの形態的特徴を記載論文 (Konta & Matsumoto, 2006) から引用すると, 「主根の長さは 4 cm で分枝する」, 「前年茎は無毛で, 長さ 20 cm で地面を這う」, 「前年茎に付く葉は長さ 1.5-2 cm, 幅 0.5-0.7 cm」, 「当年茎も無毛で, 長さ 10-15 cm で上に伸びる」, 「当年茎に付く葉は長さ 0.5-1.5 cm, 幅 0.4-0.7 cm」, 「葉は新葉時から無毛」, が挙げられる. また, 茎葉に光沢があることも特徴とされる (近田, 2007).

海岸での現地調査

調査地は青森県 (東通村の尻屋崎), 茨城県 (日立市の鵜の岬), 千葉県の房総半島 (いすみ市から富津市), 神奈川県 (横須賀市, 三浦市, 真鶴町), 静岡県の伊豆半島 (熱海市から伊豆市), 鹿児島県 (南大隅町の佐多岬), 沖縄県 (久米島) の岩石海岸である. 房総半島と三浦半島, 伊豆半島では海岸を網羅的に回ったが, その他の地域では限られた範囲しか確認できていない. 品種の判別にあたっては, ①当年茎と前年茎の毛の有無や多少, ②新葉および新葉でない当年葉の毛の有無や多少, ③茎葉の光沢, の三点に着目し, “茎葉が完全に無毛で茎葉に光沢がある個体” をケナシヒメハギと判断した. 現地観察は 2016 年 10 月から 2019 年 10 月の間に行った.

ケナシヒメハギと判断できる個体を確認できたのは茨城県 (鵜の岬), 神奈川県 (三浦半島 (横須賀市と三浦市), 静岡県 (下田市と南伊豆町) である. 他の地域のヒメハギは全個体が茎, もしくは茎葉が有毛であり, ケナシヒメハギは確認できなかった. また, ケナシヒメハギは全地域において有毛個体と混生していたが, それらの有毛個体もケナシヒメハギと同様に茎葉の光沢が強く, 葉が分厚いと感じた (図 1 左上, 右上). 鹿児島県 (佐多岬) と沖縄県 (久米島) の個体も茎, もしくは茎葉は有毛だったが, 茎葉の光沢が強く葉が分厚かった.

三浦半島ではケナシヒメハギを含むヒメハギのフェノロジーを確認した. 花期はおおむね 4 月から 5 月にかけてであり (図 1 左下), 果実期は 5 月から 10 月頃だった. 夏以降の結実は閉鎖花由来だと考えられる. 葉は常緑性で, 冬季は赤紫色に変色する個体が多かった (図 1 右下).

神奈川県博での標本調査

神奈川県立生命星・地球博物館では, 収蔵済みのヒメハギの全標本と, 筆者が上述の現地調査時に採集した標本 6 点について, ケナシヒメハギに合致するものがあるかを確認した. 確認した形質は当年茎と前年茎の毛の有無や多少と, 新葉および新葉でない当年葉の毛の有無や多少である. 茎葉の光沢は標本での確認が困難なので確認しなかった.

表 1 に, ケナシヒメハギと判断した 11 標本の一覧を示す. 5 点は既存の収蔵標本で, 全て神奈川県産である. 3 標本は海岸で, 2 標本は内陸で採集されたものである. 残りの 6 点は筆者が海岸で採集したもので, 5 点が神奈川県産, 1 点が静岡県産である. 県産標本のうち, 生育環境が海岸



図2. ケナシヒメハギおよびヒメハギの葉柄と茎の毛。
(上). ケナシヒメハギ 大井町柳 KPM-NA0167632.
(下). ヒメハギ 真鶴町岩 KPM-NA1003510. (いずれも大西亘撮影)。

と判断できたのは上述の8標本(3点が既存, 5点が筆者採集)だけであり, 県内の海岸で採集されたヒメハギは全てケナシヒメハギである。なお, 神奈川県外の海岸あるいは沿海地で採集されたのが明らかな標本は2点(KPM-NA0160815, 静岡県下田市; No. 35822, 東京都八丈町)だが, 両標本ともに茎が有毛でありケナシヒメハギとはみなせなかった。

ケナシヒメハギと基準品種ヒメハギの形態的差異は, 大半の標本において明らかだった(図2)。ただし, 既存標本の1点は, 葉は無毛だが葉柄は有毛で, 茎にわずかに毛があった(KPM-NA0175637, 伊勢原市高森)。海岸での現地調査においても, 茎葉に光沢があるが有毛の個体もみられたことから, ケナシヒメハギとヒメハギの中間的な外部形態の個体も存在するといえる。

ケナシヒメハギは海岸型品種か?

現地調査と標本調査から, ケナシヒメハギが元記載地の静岡県下田市に加えて, 同県の南伊豆町, 茨城県, 神奈川県に分布することを確認でき

た。神奈川県においては, 海岸で採集された8標本が全てケナシヒメハギであり, 本品種は海岸において高頻度で出現している可能性が高い。しかし, 内陸からも少数個体が採集されていることから, ケナシヒメハギは“海岸に多い品種”ではあるが“海岸特有の品種”とはいえないようだ。なお, 茎葉の光沢や葉の分厚さは, 茎葉の毛の有無にかかわらず茨城県以南の海岸のヒメハギに共通してみられる形質だった。

大橋(2016)やGBIF(<https://www.gbif.org/>, 2020.01.19参照)によると, ヒメハギは日本全土を含むアジア, オセアニアに広く分布する。他方で, 種子散布様式はアリ散布である(大場, 2003)ことから分散能力が低いと推察され, 各地域に遺伝的に分化した集団が存在することも考えられる。今回確認した限りでは, ケナシヒメハギの採集地は茨城県から伊豆半島に限られているが, 地域固有の分類群であるか否かの確認には, 県外の博物館などでの標本調査が必要だと思われる。

本稿をまとめるにあたり, 大西 亘学芸員にお世話になりました。また, 現地調査では井内寛裕氏, 小野勝男氏, 片野優介氏, 佐藤佑樹氏, 館野太一氏, 鐵 英子氏, 鐵 俊之氏, 東京農工大学植生管理学研究室の学生の皆さんに同行いただきました。ありがとうございました。

引用文献

- 神奈川県植物誌調査会編 2001. 神奈川県植物誌 2001. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 神奈川県植物誌調査会編 2018. 神奈川県植物誌 2018 電子版 初版. 神奈川県植物誌調査会, 小田原.
- Konta, F. and Matsumoto, S. 2006. New or interesting taxa of vascular plants from Suzaki, Shimoda City, central Japan. *Bulletin of the National Science Museum Series B (Botany)*, 31: 19-34.
- 近田文弘 2007. 伊豆須崎海岸草木列伝. トンボ出版, 大阪.
- 大場達之 2003. ヒメハギ科 POLYGALACEAE R.Br. 1814. 千葉県自然誌 別編4 千葉県植物誌(千葉県史料研究財団編), 343-344. 千葉県, 千葉.
- 大橋広好 2016. ヒメハギ科 POLYGALACEAE (改定新版 日本の野生植物2, 大橋広好・門田裕一・木原 浩・邑田 仁・米倉浩司編). 平凡社, 307-309.

県新産のオオアカバナ *Epilobium hirsutum* L. を確認した

(佐々木シゲ子・和田良子)

横浜市瀬谷区の谷戸田でオオアカバナの生育を確認したので報告する。その場所には『神奈川県植物誌 2018』編纂出版に向けての植物調査のため 2015 年から 2016 年の 9 月まで月 1 回通っていたが、調査期間中には確認できなかった。また、2016 年の秋までは、瀬谷環境ネット（代表 宮島行壽氏）の方々が環境学習農園『順環田』で米作りをされていたが、上瀬谷通信隊跡地利用計画により、埋め立てられることになったため、2017 年からは米作りが行われていなかった。私たちは調査の出現リストを宮島さんに渡し、瀬谷田んぼの調査には区切りをつけたが、その後も瀬谷環境ネットの仲間による定期観察会は行われてきた。

2019 年 7 月 20 日に瀬谷環境ネットのメンバーである中村多加夫さんが、放棄状態にある田んぼに、ピンク色の花をつけた茎の高さが 1 m 以上のアカバナの仲間を見つけた。

私たちは 8 月 2 日にかつて通っていた田んぼへ向かったが、中村さんはあいにくご都合がつかず、横浜市旭区の矢指市民の森、追分市民の森の調査時同行いただいていた上原健さんにご案内いただき

た。放置された田んぼはすっかり荒廃し、クサイ、オニスゲ、ミゾソバ、アキノウナギツカミ、コウガイゼキショウ、ヒメヒラテンツキ、ヒメガマ等が生え、その中でひととき高く茎が 1.5 m ほどになるオオアカバナが、数本確認できた。花はピークを過ぎていたが、長く伸びた柱頭の先端が大きく 4 つに分かれていることが確認できた。花と果実をつけた茎を 1 本標本にした。

オオアカバナ *Epilobium hirsutum* L. は川岸や谷間の湿地に生える多年草で、ユーラシアに広く分布し、北アメリカでは移入されたものが広がっている。国内では東北から中部地方にかけて広く分布する稀な種で、『国 RL2019』では絶滅危惧 II 類である。『神植誌 2018』によれば県内のアカバナ属植物は 4 種 2 亜種が知られているが、いずれも柱頭先端部は頭状か棍棒状で、先端が 4 裂する種は知られていなかった。柱頭の先端が 4 裂するものは、オオアカバナ、エゾアカバナ *Epilobium montanum* L. とムクゲアカバナ *Epilobium parviflorum* Schreb. がある。エゾアカバナはオオアカバナより小ぶりで、葉形は卵形、鋸歯があり、茎の毛は曲がった細い毛なので、



図1. 生育地での様子。横浜市瀬谷区 2019 年 8 月 2 日。（佐々木シゲ子撮影）。



図2. 柱頭先端が 4 裂し、大型の花弁をつける。横浜市瀬谷区 2019 年 8 月 2 日。（佐々木シゲ子撮影）。

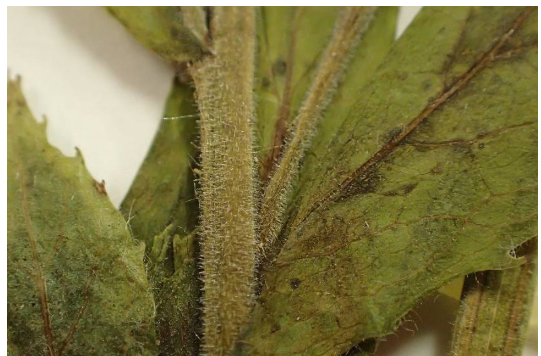


図3. 葉柄はほとんどなく、粗い明瞭な鋸歯がある。横浜市瀬谷区 2019 年 8 月 2 日。（佐々木シゲ子撮影）。

今回のものには該当しない。ムクゲアカバナとオオアカバナは、似ているようだ。今回のものは、茎はよく枝別れし、長楕円形の葉にははっきりした鋸歯があり、葉柄はほとんどなく、花のついている茎の葉は中央が一番広い。茎の毛は開出長柔毛に腺毛が混じっていた。花期が過ぎ、残り花のためか、花卉は少し小さく感じられたが、花卉の大きさは1 cm 長くらいあった。横浜こども植物園に収められていた長野県産のムクゲアカバナ(長野県安曇野市穂原矢原-ワサビ田放棄地 2016. 7. 22 構内文人・松田貴子 YCB445342)の形態を確認したところ、葉は狭い長楕円形で、縁の鋸歯は、ずっと低い鋸歯であった。葉には柄がはっきりあり、花のついている茎の葉では基部よりももっとも広く、先端に向け細くなっている。花卉の大きさも小ぶりで6 mm長くらいであり、瀬谷田んぼのものとは異なっていた。最終的には勝山輝男さんに同定確認していただいた。今後も経過観察をしていきたい。

謝辞

同定確認していただいた勝山輝男さん、発見された中村多加夫さん、現地をご案内くださった上原健

さんに御礼申し上げる。

標本

横浜市瀬谷区瀬谷町 2019.8.5 佐々木シゲ子・和田良子 YCB448011

文献

アメリカ農務省自然資源保全局 (Natural Resources Conservation Service), 2020. Plant Database. url: <https://plants.usda.gov/core/profile?symbol=EPHI> (2020年2月29日参照)

大橋広好・門田裕一・邑田 仁・米倉浩司・木原 浩編, 2016. 改定新版 日本の野生植物 3巻. 264-266pp. 平凡社, 日本.

大原隆明・高木末吉・安嶋隆, 2006. 植物地理・分類研究. 54巻1号 74-77.

神奈川県植物誌調査会編, 2018. 神奈川県植物誌 2018. xviii+1720+128pp. 神奈川県植物誌調査会, 小田原.

環境省, 2019. 環境省レッドリスト 2019. url: <https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist> (2020年2月29日参照)

C.J.Chen et al., 2007. Flora of China. 13: 414.

オニカラスムギの跳躍

(柴田七宝・木場英久)

著者の一人、柴田は桜美林大学の木場研究室の2019年度の卒研究生である。オニカラスムギが面白い動きをするのに気付いたので紹介する。

オニカラスムギ *Avena sterilis* L. subsp. *ludoviciana* (Durieu) Gillet et Magne は、県内では横浜市や相模原市で採集されている、ヨーロッパ～中央アジア原産の帰化植物である。カラスムギ *A. fatua* L. に比べて、花序も小穂も大きく、カラスムギが小花が1個ずつに分かれて散布するのに対して、オニカラスムギでは包穎と第一小花の間で折れて、2～3個の小花がまとまったままで散布される違いがある。つまり、カラスムギでは小花をつなぐ小軸と、すぐ上の小花の基部の間に離層が作られて折れやすくなるのに、オニカラスムギではそこが折れない。ぐいぐい引っ張っても切れないぐらい丈夫である。

カラスムギは小花の護穎の背側から芒が生えていて、途中でくの字に曲がっている(図1)。この曲がった場所より付け根側は乾燥するとねじれていて、湿るとねじれがほどけて、芒の先の部分をゆっくりと回転させる。そして乾くと逆回転して

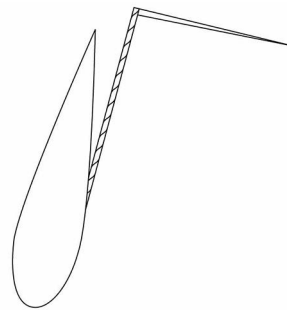


図1. カラスムギの小花の模式図。

もどる。野外では雨などにより熟した小穂が濡れたり、その後、乾いたりしたときに芒の先を動かして、みずから小花を花序から離脱させているようである。ここまではどこかに書いてある話である。

花序から外れたカラスムギの小花は、乾湿を繰り返すと地上を弧を描いて転がる。そうするうちに、居心地の良い場所に行きつくのだろう。とてもよくできていると思う。その一方でオニカラスムギはどうか。多くはふたつの小花が内穎側を向かい合わせてつながっている。ふたつの護穎の外側にはカラスムギと同じく根元がねじれてくの字に曲がった芒がついている(図2)。これは想像し

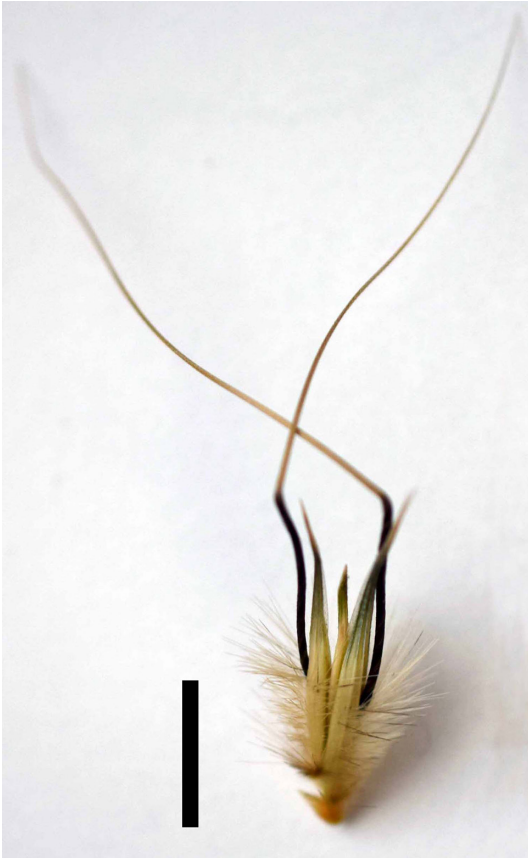


図2. オニカラスムギの散布体. スケールは1cm..

てみるといろいろと問題がありそうである。

ひとつには、散布体（小花が複数個つながったもの）が大きくて平たいので転がりにくそうである。芒の動きもうまくシンクロしないと絡まりそうである。

そして、もうひとつは少々理屈っぽくなるが、コストがかかるということである。カラスムギ属の種の多数派は小花が1個ずつに分かれて散布されるし、複数の小花と一緒に散布されるのはオニ

カラスムギともう1種だけである。また、カラスムギ属に近縁な属をみてもみんな基本的には小花は1個ずつバラバラになって散布される。つまり、小花がつながったままで散布される性質はオニカラスムギの祖先で起きた突然変異により獲得されたものと思われる。この突然変異が淘汰されずに種の特徴になるには、この性質が次の世代に伝わりやすいように、多くの子を残せるようなものでなくてはならない。

しかし、ひとつの小花が散布体だった状態から、2個の小花がつながったものが散布体になったとしたら、散布体の数は半減してしまう。ひとつの小花を作るのに必要な栄養分はみな同じと考えると、ひとつの散布体をつくるコストが2倍になるということである。オニカラスムギで観察してみたら小花の2個ともによく熟した果実がはいっていた。

それでもひとつの散布体から2個体が生き残るならまだよいが、隣の小花から発芽した兄弟同士は、きっと水分や養分を取り合ったり、どちらかが陰になったりして競争が起きることが予想されるので、生き残る確率も下がりそうである。オニカラスムギのお母さんはなぜこんな兄弟げんかが起きるようなことをしたのであろうか。

他の植物を見てみると、兄弟と一緒に散布される例はたくさんある。イチゴやクワの実が鳥に食べられて運ばれるとか、オオバボダイジュの果実やアオギリの種子がひとつの羽で散布されるなどの例があるが、これらは一緒になることにより資源を節約するメリットがある。もしもクワの実がタネ1個ずつを含むような小さい果実をバラバラに作っていたら、鳥は食べてくれないであろうし、タネ1個ずつに羽をつけるよりもいくつかを一緒ににした方が1個のタネあたりの材料費を節約できることであろう。しかし、オニカラスムギはこう

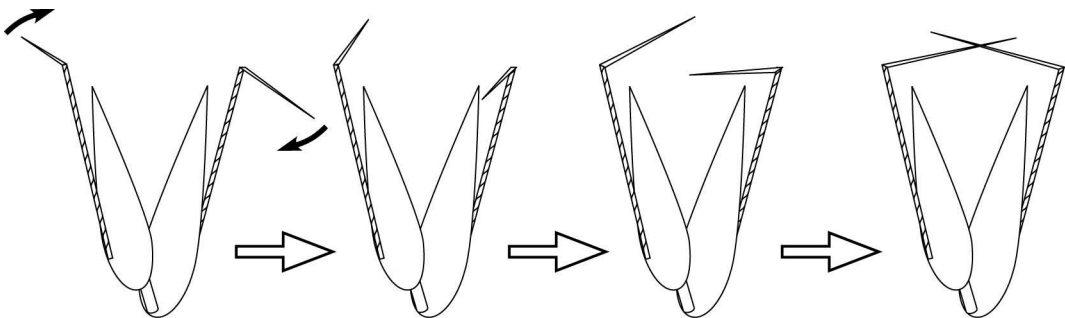


図3. オニカラスムギの2小花の芒の動きの模式図.

いう例には当てはまらない。離層ができないことによって資源が節約できるとは考えにくい。つまり、散布体が半減するデメリットを乗り越えるようなメリットが何かないと、この性質は進化できないはずなので不思議なのである。

オニカラスムギの散布体を実際に湿らせる実験をした。すると、芒はカラスムギと同じように動き出し、不器用に転がることも見られたが、じっくりと5分ぐらい観察していると、あるときピョンと跳躍するのが観察された。10回実験して9回観察された。ふたつの小花から生える2本の

芒は同じ向きにねじれているのでしばらくすると中央で出会い、先端を絡ませ、動かなくなるが(図3)、その間も芒の付け根のねじれはほどこけていて、力が芒にたまる。そして、力に耐えきれなくなって芒の先のもつれがほどこけたときに、一気に力が解放されて散布体全体をジャンプさせる。

昔々オニカラスムギは、転がるだけでは乗り越えられないような問題を、飛び越えることによって解決して生き残ってきたのではないかと妄想は膨らむ。

シャジクモ類の2019年度調査速報

(大西 亘)

昨夏、FLORA KANAGAWA 87号で神奈川県レッドデータブックの再編にあたっての「シャジクモ類調査への協力」を呼びかけたところ、会員のみなさんや関係する団体、個人から標本の提供をいただいた。ここにご協力へのお礼を申し上げるとともに、簡単ではあるが報告を兼ねて、確認されたシャジクモ類の記録について県内の地理的な分布を紹介したい。図1には、『県植誌2018』の調査区を黒線で区

切った神奈川県(と一部周辺地域)の地図上に、県下のシャジクモ類の記録地点(緑色の×)、水田(薄い緑色の点)と河川や池等の水面(薄い水色の点)を示した。水田が多くある地域での記録がある一方、この縮尺の地図上では示されない規模の谷戸の水田やため池など、小規模な湿地でも記録されている。ただし、今回の結果は県内全域のシャジクモ類の生育状況を示すものと言うより、採集者の活動範囲が強く反映されたもののように思われる。記録からはシャジクモ類は水田やため池の他、放棄田など日当

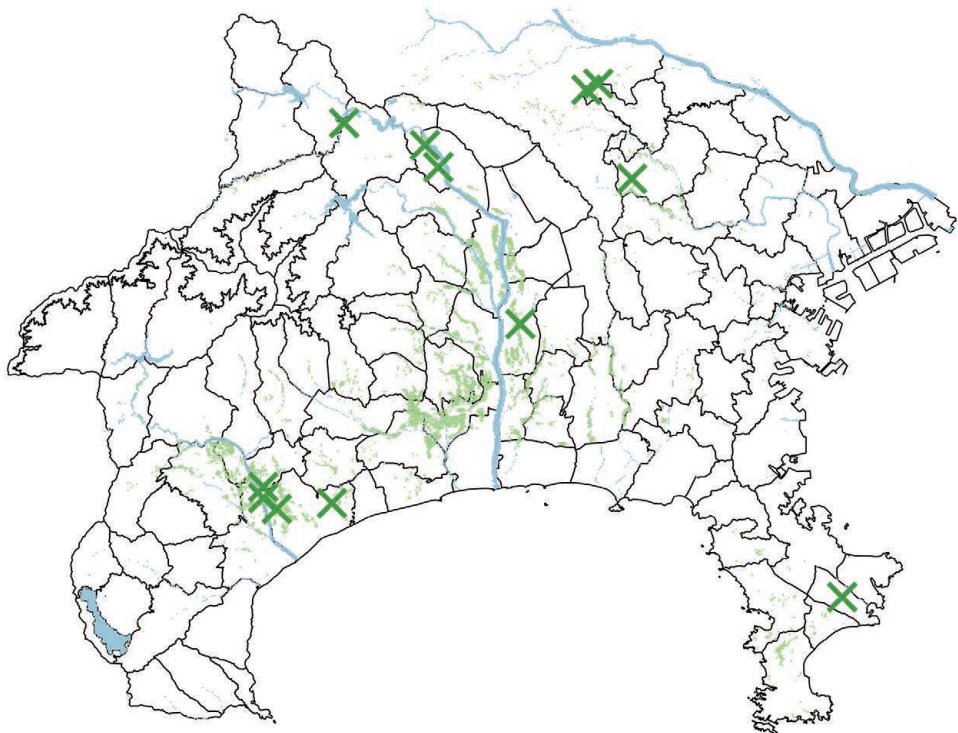


図1. 2019年度の調査で得られたシャジクモ類の県内分布。
国土数値情報土地利用細分メッシュデータを使用し、著者が地図を作成した。

たりのよい遷移途中の小湿地に生育が見られ、潜在的には現状の記録より広範囲に分布していることが予想される。現在記録のない地域においても今後記録が蓄積されることを期待したい。

ところで、今回複数種の標本を寄せて下さった伊藤晁逸さんによると、シャジクモ類を上手く見つけるコツは、広く普通にあるシャジクモに目を慣らしておき、付近に生育する他のシャジクモ類が示す少しの違和感に気づけるようになっておくことだそう。図1の左下に示される地域の2地点では、シャジクモと同所的に他にはないシャジクモ類2種が記録された。より多くの方にシャジクモへ目を向けていただき、見分ける目を養っていただくことで、県下の新産地あるいは新分類群の記録が増えることを期待したい。県下のシャジクモ記録の詳細については、今後神奈川県から発表される神奈川県レッドリスト/レッドデータブックを参照されたい。

【訂正記事】前号掲載『『神奈川県植物誌2018』とYListの和名の対照表』の訂正について

(須貝光咲・木場英久)

フロラカナガワ87号に、神奈川県植物誌とYListで異なる和名を使っているケースのリストを投稿したが、コシロノセンダングサ、コバノタツナミ、タイアザミ、トキワシノブは、どちらも同じ和名を使っていた。また、アレチカミツレは、YListではキヅメカミツレではなくキジメカミツレであった。ナガボハナタデはYListでは、ホソバハナタデではなく、ハナタデのシノニムにしていた。すべて、木場の誤りである。ここに訂正させていただきます。

『植物誌2018』ができるまでII

(事務局)

会員のみなさんに、『植物誌2018』が出来上がるまでのもろもろの活動を振り返り、生の声をお寄せいただくことをお願いした。調査の準備や日々の標本整理活動、ブロックそれぞれの課題など、『植物誌』の本冊に残らない活動の実態が次世代に伝えられればと考えている。

各調査ブロックごとに87号から何回かに分けて掲載の予定。今号は西湘ブロックのうち大井町の調査グループからお寄せいただいた。

・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

大井町植物調査によせて

(大井町植物誌調査会 平本康子)

2018年神奈川県植物誌を作成するに当たって、大井町の調査は大井町教育委員会おおい自然園の一寸木肇さんと、大井町在住の平本で担当することになりました。二人共、意欲はあったのですが、様々な植物の同定が十分でなく、調査がなかなか進みませんでした。

本格的な調査は、2012年10月からで、年内2回行い、2013年1月から、秦野グループに応援してもらうことになり、「いちにの会」を結成して調査活動を続けました。ところが、秦野グループも地元の調査が忙しくなりましたので、2014年4月から3名の新しいメンバーを迎え、月一回の調査を実施してきました。新メンバーは抜群の標本作りをする永田麻起子さん、様々な植物に詳しく、小田原市・南足柄市開成町・松田町の調査も担当している伊藤晁逸さん、生まれも育ちも大井町で大井町のすみずみまで知っている内田憲治さんです。

しかし、月一回の調査では間に合わず、永田さんと時間を見つけては歩きました。時には迷子になり、スマホのGPSを頼りに、林内から抜け出したこともありました。2014年6月には、支倉千賀子さんが調査の応援に駆けつけてくださり、分類がむずかしいタケ・ササの調査が進み、とても助かりました。2015年5月には、井上香世子さんと松田町との境界を調査した際、スギ林の中でシカの糞を大量に見つけ、シカ害が広がっていることを実感しました。かつて、井上さんは1994年から3年間にわたり、大井町を調査、2002年



大井町植物調査会のみなさん。『植物誌2018』刊行後の新メンバーを囲んで。(2020年2月19日撮影)



大井町植物調査のようす。(左上から時計回りに、2014年6月27日、2015年3月24日、2015年4月16日、2019年10月9日撮影。『県植誌2018』刊行後も地道に調査を続けています。)

には約200ページの「大井町史 別編 自然 大井町の植物」としてまとめていました。その綿密な調査により大井町を7地区に分けた植物リストを作成しており、このリストと2001年版のリストと合わせて、大井町独自のリストを作成、それを片手に2016年末まで調査を行いました。なお、今回の調査では町内を9地区に分けて調査を行いました。

調査中一番困ったことは農耕地が多いため、草がすぐに刈られてしまうことでした。もう少し成長してから標本にしようとしてしばらく待っていると、姿を消しているのです。農家の方にとっては、いたしかたないことですので、タイミングを見計らって標本を採取する術をすこしづつ身につけていくことになりました。

町内には珍しい植物は多くはありませんが、それでも、キツネノカミソリ、コケオトギリ、クマガイソウ、ヤマナラシに出会えた時は、本当に嬉しく思いました。期限までに調査を通して採取したのは918種に及び、これらの標本は全て、神奈川県立生命の星・地球博物館に収めることができました。

ことある毎にお力を戴いた皆様に感謝いたします。ありがとうございました。



『神奈川県植物誌2018』関連展示の開催報告

(事務局)

FK87号でご案内させていただいた通り、『神奈川県植物誌2018』と当会の活動を紹介する県博巡回展／関連展示が2019年度も県内博物館で開催された(あつぎ郷土博物館での展示については、FK87号発刊後に博物館のご都合で開催日程の変更があった)。

ここでは、平塚市博物館の松本さんと、茅ヶ崎市文化資料館の馬谷原さんからお寄せいただいた開催報告をご紹介します。

この他の展示についても開催報告をお寄せいただければ順次掲載したい。

「新しい神奈川県植物誌と湘南の花」
(平塚市博物館 松本典子)

展示期間 2019年10月3日(木)～10月29日(火)
展示場所 平塚市博物館一階寄贈品コーナー

『神奈川県植物誌 2018』の発行を記念した巡回展として、平塚市博物館では「新しい神奈川県植物誌と湘南の花」と題した展示を開催しました。この展示は当館と湘南ブロックの会員が話し合いを重ねて、展示の方向性や手法を企画しました。特別展ではなく約1ヶ月と短い期間の展示のため、植物誌の調査を通じて会員が見てきたものや楽しさを紹介しようということになり、会員の愛してやまない湘南の植物の「花」を中心に展示を行うことになりました。

花の写真は湘南ブロックのメンバーが撮影したものを持ち寄り、パネルとして30種、スライドショーで182種を紹介しました。また、湘南全域(江ノ島から大山まで!)で見られる種類や第3次調査で初めて見つかった在来種、今回の調査で



『神奈川県植物誌 2018』と過去の植物誌。調査で使ったチェックリストも展示。本を秤に載せた展示方法は賛否両論。(2019年10月27日撮影)

は(どんなに頑張っても)見つからなかった種を標本を用いて紹介しました。

会期中は多くの方が足を止め、熱心にご覧になっていました。特に今回見つからなかった種類については様々なご意見をいただきました。標本と神奈川県植物誌の関係について詳しい説明を求められる方や植物誌を手に入れる方法について尋ねられる方もあり、神奈川県植物誌調査会への関心を高めることができたと考えています。



展示全景。中央にスクリーンを設置し、スライドショーで写真を紹介した。(2019年10月27日撮影)

茅ヶ崎市文化資料館での植物誌展示
について

(茅ヶ崎市文化資料館 馬谷原武之)

茅ヶ崎市文化資料館は1971年の開館以来、長年にわたり市民の皆さまと協力した博物館活動を行っています。このたび植物誌関連の展示会として、巡回企画展「調べてきた！集めてきた！茅ヶ崎の植物と『神奈川県植物誌2018』」(2019年10月8日-12月8日)を開催致しました。

本展では神奈川県立生命の星・地球博物館で開催された「植物誌をつくろう！～『神奈川県植物誌2018』のできるまでとこれから～」の巡回展示と共に、茅ヶ崎市内で確認された植物、地域

における長年の調査や収集保存の活動について、植物標本や写真、調査データから「身近なタンポポ調査」、「市内で見られる植物」、「集められてきた植物標本」等、複数テーマの展示を行いました。また、講座やギャラリートーク、自然観察会を開催し、多くの方々にご参加頂きました。

来場された方からは「日頃、目にしているものの再確認や、今まで見過ごしてきた植物を見直したい」、「植物を通して自然環境の変動を知る事が出来た」等の感想が聞かれ、地域の植物誌、自然環境について興味関心を持たれた様です。

開催にあたり神奈川県植物誌調査会をはじめ、多くの方々のご協力に感謝申し上げます。



企画展示の導入部分。『神奈川県植物誌2018』も実物をそのまま展示。(2019年11月3日撮影)



茅ヶ崎の植物を標本とともに紹介するコーナー。ケース内には過去のタンポポ調査について紹介。(2019年11月3日撮影)



砂丘から掘り取った海浜植物の根茎を壁面に紹介。(2019年12月15日撮影)



ギャラリートークの様子。

目次

鐵 慎太郎：ケナシヒメハギについて.....	1047
佐々木シゲ子・和田良子：県新産のオオアカバナ <i>Epilobium hirsutum</i> L. を確認した ..	1050
柴田七宝・木場英久：オニカラスムギの跳躍	1051
大西 亘：シャジクモ類の 2019 年度調査速報	1053
須貝光咲・木場英久：【訂正記事】前号掲載 “『神奈川県植物誌 2018』と YList の和名の対照表” の訂正について	1054
事務局：『植物誌 2018』ができるまで II	1054
西湘ブロック：大井町植物調査会 平本康子：大井町植物調査によせて	1054
事務局：『神奈川県植物誌 2018』関連展示の開催報告	1055
平塚市博物館 松本典子：「新しい神奈川県植物誌と湘南の花」	1056
茅ヶ崎市文化資料館 馬谷原武之：茅ヶ崎市文化資料館での植物誌展示について ..	1057
事務局：今後の『神奈川県植物誌 2018』関連展示の予定	1058
事務局：総会の 4 月開催は見送ります	1058
編集後記	1058

今後の『神奈川県植物誌 2018』関連展示の予定

(事務局)

『神奈川県植物誌 2018』と当会の活動を紹介する展示はさらに続きます。現在予定されているものは以下の通りです。ぜひお出掛けください。

「巡回企画展示「ヨコスケンセーよこすかの歴史を彩る植物たち」

会期:2020年3月14日(土)~2020年5月31日(日)

会場：横須賀市自然・人文博物館

横須賀市深田台 95

TEL: 046-824-3688

盛況のうちに先月閉幕した企画展示「巡回展『神奈川県植物誌 2018』と三浦半島の植物たち」に続く、巡回展第二部として、杉田のスギなど第一部からの継続展示資料とともに、第一部で取り上げることでできなかった江戸から昭和初期の植物研究の文献資料、ペリーやサヴァチェの関連資料、横須賀市博の初代植物担当で『神奈川県植物誌 1988』の調査にも先鞭をつけられた大谷茂学芸員に関する資料、会期中に野外で見られる春の花などの紹介があるそうです。第一部は各地の調査会会員の方々から、お出かけになった後の好評の声が聞こえてきましたね。第二部も楽しみです。

※開館時間や休館日については、横須賀市自然・人文博物館まで直接お問い合わせ下さい。

総会の 4 月開催は見送ります

(事務局)

編集後記

次号は運営委員会報告とあわせて、初夏～夏頃の発刊を目指したいと考えております。新産、新記録、新発見や植物誌調査のお役立ち情報のほか、『県植誌 2018』にまつわる各地の活動、「植物誌関連展示」のご報告についても引き続き原稿をお待ちしております。外出が不安な方もそうでない方も是非お寄せ下さい。(大西 亘)

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館内

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@flora-kanagawa2.sakura.ne.jp

郵便振替 00230-5-10195

加入者名 神奈川県植物誌調査会

年会費 2,000 円